

# 利尻島:利尻岳 登頂

古川 真人

夏に北海道の利尻島:利尻岳(利尻山)に登りました。

利尻岳は「日本百名山」の最北の山。また「花の百名山」としても有名。トップシーズンは宿の確保が難しいとの情報により、数ヶ月前に空路を含め予約しました。予約から出発までの長いこと。熱が冷めなようにガイドブックを読み返す日々が続きました。そして、待ちに待ったその日がきました。



羽田を9時半に発ち、新千歳で乗り換えて利尻に14時に着く予定でしたが、生憎の悪天候で新千歳～利尻便が欠航。翌日の便は既に満席。初日からトラブルで先行きに不安が…。空路を諦め札幌から稚内までバスで移動し、そこからフェリーで行くことにしました。札幌を深夜に発ち、稚内港フェリーターミナルに着いたのが翌日の5時半。急ぎ乗船窓口へ行くと本日便は欠航の表示。「迂回の苦労は何だったんだ」と落胆し横になっていると、13時半に臨時便予定との発表あり。この発表に救われ気力回復、食事を済ませ出港を待ちました。

臨時便は予定通り出港。欠航の影響もありツアーの団体がフェリーに殺到し満室状態。場所の確保に殺気が…。どうにか確保したものの外洋は波が高く船酔いの人もありました。そのような状況のなかで鴛泊港に15時接岸、待望の利尻島に上陸しました。地に足が着いたその時、フーッと一息、利尻岳を仰ぎ見て「明日はあそこか」と奮起したものです。



利尻岳

翌朝4時半に出発。やや雲有・風有でしたが、まあまあの天気。利尻北麓野営場(登山口)を起点に頂上を目指しました。登り始めて1時間半、六合目の第一見晴台に到着。ここで一息、遠くに浮かぶ礼文島を望み、これからの急登に備えて気を引き締める一時でした。



北麓野営場 (登山口)



礼文島を望む

六合目を過ぎてしばらくすると霧がでてきて、それから一時間ほど登った第二見晴台では濃霧で視界は30mほどになり、礼文島をはじめ下界は確認不可に…。気温も下がり強風、それに雨が降り出したので雨具に着替え先を急ぎました。予定では花の百名山たる高山植物を観察しながらの「のんびり登山」の予定でしたが、状況悪化のため先を急ぎ黙々と登りました。中には登頂を諦め引き返す人もいました。

九合目辺りになると益々状況悪化。登頂前に「残雪なし」を確認したにも関わらず、登山道に大量のこぶし大の氷がゴロゴロ。地面は凍結していないのに、この氷は一体どこから…。頭の中が？？とパニック状態になっていると、登頂者が正体は「霧氷」と教えてくれました。これより先は霧氷の山で、強風に煽られた氷が飛んでくる危険な場所もある上、登山道は氷に覆われ滑りやすく、登頂には相当な注意が必要とのことでした。話を聞いて躊躇いましたが、「霧氷」に興味もあり、このまま進むことにしました。

それから30分余、益々の急登。氷を払い足場の確保に注意をし、草木や岩などを掴みながら周囲を見る余裕のない前進でした。が、一息つき頭を上げると一面霧氷が…、その霧氷の美しいこと。正に花(霧氷)の百名山！！、未知の世界に感動！！。その光景にしばらく見入っていました。また霧氷の珍しさもあり、触ったり、枝を揺すったり、子供のようにはしゃいでいました。



行く手を阻む濃霧と強風



霧氷

そんな状況の中、登頂開始から4時間余の頂上でしたが、濃霧で視界は10m程度。祠は氷に覆われ冬模様。当初は登頂の満足感に浸りながら食事をし、360°の大パノラマを堪能しての下山予定でしたが、寒さと強風それに雨の三重苦の状況では長居はできず、僅かの休憩で下山しました。



利尻山頂

登りは氷を掻き分け、足場を確保しての前進でしたが、下りは足場の確保が難しく滑ることも…。とっさに枝を掴んで大事に至りませんでした。最悪の場合滑落…の不安が頭を過りました。それからは一步ごとに両手を使い、体勢を保ちつつ足場に注意を払い、「ウム…良し」と確認しながらの下山でした。

九合目を過ぎると霧氷もなくなり、七合目辺りに来ると雨・風も弱く、霧も少なくなり、六合目辺りでは日差しが…。今回の天気の変化は初体験で、山の天気には細心の注意が必要と痛感させられた一日でした。



ウコンウツギ



エゾノハクサンイチゲ

宿に着くと早速風呂に…。悪天候の中、行く手を阻む氷と、霧氷の美しさに見入った一時を思い出しながらの長湯でした。湯上がり後、女将が教えてくれた居酒屋へ。まずは無事を祝って乾杯、その一杯のビールの旨いこと。肴は勿論海の幸。屋久島：宮之浦岳とはまた違った記憶に残る1ページを振り返りながらの一杯でした。時間が早かったこともあり客は4組、その内2組が外国人でした。日本を訪れた昨年度の観光客は 3,100 万人とのことですが、こんな離島にまで…。「お・も・て・な・し」が頭に浮かんで、また一杯。今宵も爆睡。

翌朝、駕泊港を8時半に出港。稚内と新千歳で乗り換えて羽田に着いたのが15時半。帰路は予定通りの工程でした。

今回の利尻岳は、悪天候のため高山植物を観察しながらの「のんびり登山」ではありませんでしたが、この季節では珍しい霧氷の歓迎を受け、記憶に残る山旅となりました。が、日本百名山の著者：深田久弥は利尻岳を、「島全体が一つの頂点に引きしぼられて天に向っている。こんなみごとな海上の山は利尻岳だけである。」と表現した、その一つの頂点からの大パノラマをこの目に焼き付けることができなかつたことが心残りではありません。機会があれば高山植物の宝庫といわれる「礼文島」と併せて再度訪れたいと思っています。